〜〜中略〜〜

仁賀が紫蘭生の手を取って村の方へと歩き出した。

「手、濡れるよ」

「気にしないさ。ほら、これで顔を拭くといい」

空いている方の手に手巾を握らせてきた。

結局、仁賀の家で待機していたものの、両親も赤ちゃんも見つからなかったと言って仁賀が帰ってきたときは既にそうだろうと思い始めた頃だった。

待っている間に、子どもたちから聞いたのだ。あの道が子泣き街道と呼ばれていることを。

紫蘭生は家塾の子どもたちの一員になった。

継釈一三〇年

素振りに飽きた紫蘭生は、竹刀を下ろして稽古部屋を出た。同じように稽古をしていた子どもたちが非難するような視線を向けてきたが、誰も口には出さない。仁賀の部屋の戸を開けた。仁賀は出かけているようだ。丁寧にたたまれた蒲団が手前に置いてあり、奥に机と腰掛けが並んでいる。その後ろの壁には宝刀が飾られていた。武芸を管理する栗海会から授かったものだ。仁賀からは触らないように言いつけられている。

「それは飾りじゃないでしょ。なんで使わないの。せっかくの宝刀が泣くわよ」

と言っても黙って首を振るだけで取り合ってもらえなかったことを思い出す。稽古がつまらないと感じるたびに同じ事を仁賀に言っている。今も言おうとしていたのだが、いないなら仕方が無い。やることがなくなった紫蘭生は家を出た。

田舎の村には珍しいことなど何もない。何も起こらない。商人も滅多に来ない。生活に必要な者は村の人間が買い付けに行くからだ。村人もそこからしか買わない。田畑を耕し、糸を紡いで服を作り、主人にこき使われる。大抵の人間はそんな生活を繰り返している。そこに漏れている紫蘭生でさえ、毎日同じ稽古の繰り返し。座学の内容は変わるがそれも退屈だった。そんな中で、唯一代わり映えするのが店が建ち並ぶ通りにある掲示板だった。紫蘭生は暇さえあればそれを眺めていて、村の外に思いをはせるのが好きだった。

こんな田舎でも掲示板には大抵複数枚の紙が貼られている。一度見たものから視線をずらして、新しいものを見つけた。人相状だ。屍街道に現れたらしい。村人が一人襲われたようだ。報酬は五十柱。屍街道を通る者は、金はおろか、命すら残らないと言われている。しかし、もう一つの道、子泣き街道よりも近道ができるので、度々通る人間が現れるのだ。

当然仁賀からは屍街道に近付くことは禁止されている。素直に言いつけを守っていたた

ため、紫蘭生は今まで行ったことがなかった。
もう一つの紙には鵺の会の門下生の募集要項が書かれていた。試験を合格した者または推薦状があるものに入門の資格があるようだ。
紫蘭生が使っている流派は凌遅流と聞いたことがあるが、正式には認められてはいない。登録する機会があったのに、しなかったのだ。このことでも仁賀と言い合ったことがある。ますます気分が落ち込んだ。家に帰る気にもなれずに通りを当てもなく歩く。何やら珍しく、料理屋に村人が固まっているのが見えた。入り口から人があふれている。気になって、人の塊をすり抜けて中に入ると、注目の的が目に入った。刀を差していて、土で着物や手が汚れていない。何よりその自由な雰囲気。一目で旅人だとわかった。
「なんで、こんなに人が集まっているの？」
旅人は矢継ぎ早にされる質問に笑顔で答えていた。騒音に紛れていて聞こえない。そばにいた人間に事情を尋ねた。旅人がこの村に来るのは珍しいが、大人が仕事を帆降りだしてまで騒ぐことではない。
「盗賊を仕留めたんだよ。噂になっていただろ。もう何件もやられたんだ。俺の店にもいつ来るかと気が気じゃなかった」
「そんなことがあったんだ」
仁賀の家はそこらの民家とは離れたところにあるため、紫蘭生はその噂を知らなかった。そこらの民家に入るより、仁賀の邸宅のように、誰がどう見ても人を雇わないと生活が成り立たないような屋敷に盗みに入った方が実入りが多いと思うのだが怖じ気づいたのだろうか。
「役人なんぞ、呼んでもすぐに来やしねえ。こういうときは旅人頼りだな」
誰かの言葉に旅人は気分良さそうに笑みを深めた。紫蘭生が旅人の目の前に出る。
「ねえ、そんなに腕に自信があるのなら、私と手合わせしてよ」
「へえ。竹刀で？」
旅人が紫蘭生が帯に指していた竹刀に目を落とした。村人が一斉に笑い出す。
「家が道場なの。竹刀、貸すわよ。それか、誰か刀を持っていてくれたらいいのだけれど」
こんな田舎の村に鍛冶屋はないことはわかりきっていたが、物は試しだ。聴衆を見渡しながら言った。すると旅人は視線をさまよわせた。面倒に思われたようだ。
「困ったな」
「おら、ガキはあっち行ってろ」
全く困っていない口ぶりなのは誰が見ても分かるのに、旅人のご機嫌を取ることにしたのか、村人から野次が飛び料理屋から追い出されてしまった。
絶対に旅人よりも実力があるのに、誰もそのことに気づいていない。竹刀がいけないのだ。刀をぶら下げていれば本気にしたはず。そう思った紫蘭生は家に走った。

仁賀はまだ帰っていなかった。竹刀を無造作に放り、宝刀を手に取る。鞘から少し刀身を出しただけで身震いがした。これが、ずっと、紫蘭生が持ちたかったものだ。竹刀では得られない感触だ。すぐさま腰紐に通してぶら下げた。周りの人間が認めないなら、盗人よりも大物を仕留めてやる。

今まで屍街道に行ったことがなかったのは、禁止されていたというのもあるが一番の理由は行く意味がないからだ。必要な物は仁賀か使用人が買ってくる。紫蘭生の生活は家にいるだけで成り立っていた。

入ってみれば何てことは無い。確かに木は生い茂って薄暗いが影ができるのは当然のことだ。怖さはない。子泣き街道より歩きにくさは感じられるがそれだけだ。ふと、気配に気づき咄嗟に刀を抜いた。刀がぶつかり合う。飛び退くいて姿を確認する。

「本当にいるのね・・・・・」

まさに人相状の男だった。人相状では肩から上しか描かれていなかった。想像していたより、体格は良く、身なりも良い。男は不意打ちを払われたことに驚いていたようだ。

「構えが汚いわ。ふざけているの？」

男が構え直した時にはすでに紫蘭生は相手の懐に入っていた。そのまま流れるように胸を一突きした。男の動きが一瞬止まり、紫蘭生が腹を蹴ると、そのまま刀は抜けて、仰向けに倒れた。

死んだ男をまじまじと見詰める。あっけない。間違えて殺していないかと顔を確かめたが、確かに人相状の男だ。これで間違いなら人相状を描いた人間が悪い。紫蘭生は刀を鞘に収めた。

胸に空いた穴から血が流れて着物を染めていった。鮮やかな黄緑色の着物が染まっていく。ふと倒れた拍子に落ちたであろう袋が目に留まった。手に取ると、ずっしりと重さと硬さが感じられた。どうして、賞金首になるまで、犯罪をするのか。それは生計を立てられるからだ。見た目にも現れていたが、それ以上に稼ぎは良かったようだ。

金が入っているであろう布袋をそのまま地面に捨てた。屈んで男の片足を両腕で抱えるようにして持つ。力を入れて引いてみたがさすがに村まで運べそうにはなかった。しかし、人を呼んでいる間にたまたま役人が通りかかりでもしたら困る。報酬を渋って誰が仕留めたかなど調べることもなく帰ってしまう。

人相状の男を紫蘭生が仕留めたという証拠が必要だ。それならやはり首だろう。紫蘭生は刀を抜いて、男の首に刃先を当てた。そのまま染み渡らせるように刃を沈めていく。地面に当たった感触がしたところで刀を抜いた。髪の毛を掴んで体重を乗せて引っ張ってやると胴体からちぎれた。

こんな切れ味のいい刀、やっぱり使わないなんてもったいない。

首を壺を持つように両手で抱えて村に帰ると、ふと紫蘭生に視線をやった村人がすぐに、悲鳴を上げて去って行った。一人、また一人。旅人が盗賊を仕留めた時も初めはこんな反応だったのだろうか。不思議に思って首を頭上に掲げて見せようと思ったが、既に誰も居ない。家に帰ると仁賀も帰っていたようだ。村中が騒ぎになっているからか、ちょうど表にいた。仁賀は両腕にある生首を見ても特に何も言わず、ゆっくりとこちらに歩いてきて、紫蘭生の背中をやんわりと押した

「入りなさい」

仁賀は自分の部屋には入らずに、客室に入った。背中に添えられていた手がそのまま腹にまわり、仁賀の膝の上に座らせられた。何か言おうと思った矢先に、次々と村人が飛び込んで来ては、生首を見て踵を返す始末。何がしたいのだろうか。

「みんなわざわざ見に来るなんて、疑り深いのね。それにしても、なんでみんなはどうやって仕留めたの？　とか、どこで見つけたの？　とか聞かないのかな」

「怖がっているんだ。それどころじゃないだろう」

「なんで。旅人の時はみんなそんな感じのことを聞いていたのに」

「それは実際に見ていない人が噂を聞きつけて興味本位で聞いているだけだろう」

「生首がいけないのね。確かに旅人が盗人を仕留めた所を直接見たっていう人はいなかった気がするわ」

「そう思うなら離しなさい」

仁賀が紫蘭生の手を取ったがすぐに振り払った。

「嫌よ。役人が来るまでは離さないわ。どうせ、これがなきゃ誰も信じないんだから」

するとまた部屋に入ってきた者がいた。学童の一人だった。分別もつかないような幼児がおぼつかない足取りで近寄ろうとする。

「部屋にいなさい！」

仁賀が怒鳴るとそれ以上近付いてくることはなく、半べそをかきながら部屋から出て行った。

「良いじゃない。別に。あれくらいの年なら死体くらい見たことあるはずよ」

仁賀は何も言わなかった。紫蘭生はふうとため息をつく。機嫌が悪くなると黙るのを止めて欲しい。

次に入ってきたのは役人だった。三人ほど束になって向かい側に立って見下ろしてきた。

「賞金首を捕らえたのは、そちらのお嬢さんだとうかがったのですが」

「その通りよ。この生首が見えないの」

掲げて見せると、真ん中にいた役人が生首を受け取った。右隣にいた役人が真ん中の役人に小声で言う。

「死体を拾ってきただけではないでしょうか」
「まだ足りないっていうの。ならこれを見なさいよ」
紫蘭生が刀を抜くとは思わなかったのか、役人が腰の刀に手を伸ばした。しかし、誰も抜くことはなかった。紫蘭生が抜いた刀をまじまじと見ている。血が付いた刀だ。
「この辺りに刀はこれしか存在しない。後は旅人が持っているのもあるけど、村人に囲まれていた。それにこの刀はそこらにあるような刀じゃないわ。宝刀よ。そんなものを使おうとする人間なんて限られている」
「あなたは何をしていたんですか」
役人が仁賀に尋ねた。
「子どもたちを相手に読み聞かせをしておりました」
「え、家にいたの？　気づかなかった」
「……お嬢さんが家にいないことには」
「申し訳ございません。気づきませんでした」
「なんで謝るのよ。賞金首を仕留めたのに」
「まあ、いいでしょう。お嬢さん。報酬です」
役人が紫蘭生の手に包みを握らせた。どうやら信じることにしたらしい。ようようと立ち去る役人の背中を見送った後で、包みを開いた。
「これ、私のお金だわ。何に使おうかな？」
そういえば、欲しいものなんて考えたこともなかった。
「そういえば、五十柱って一ヶ月分の使用人の給金と同じよね」
「大切に取っておきなさい」
仁賀がやっと膝の上から解放してくれた。取り上げられないうちに宝刀を鞘にしまう。
「仁賀。この宝刀を使ったことないでしょう。使ったことがあるなら、飾るなんてことしないもの。そうだ。梅！」
すぐに下女がやってきた。
「誰かあの旅人を連れてきてよ。買い出しに行くあなたなら知ってるでしょ。あいつ、手合わせしたいって言ったら小馬鹿にしたように笑ったのよ。決着を着けるべきだわ」
梅は体を震わせてうつむいた。この家には都合が悪くなると黙り込む人間しかいないのか。
「給金を下げるわよ」
「下げません。落ち着きなさい。紫蘭生。梅、ここはいいですから」
梅が下がった。
「良いわよ。自分で探すから」
「もう村を出ましたよ」

「信じない」
ずっと家にいた仁賀が何を言っているのか。家を飛び出した紫蘭生だったが、結局旅人は既に村を出た後だった。村人から聞いた話によると、何やら慌てていたらしく、宿に荷物が残されたままだったらしい。
「あんたから逃げたんだろうな」
村人からその言葉を聞いたとき、胸の中に渦巻いていたものが消えていくのを感じた。

継釈一三二年

紐で束ねられて、木にくくりつけられている藁を紫蘭生は刀で切り落とした。庭に設置した藁を次々と切っていく。藁がもったいないので、成人男性の頭から太腿までの長さの藁を、最後の最後、首から頭ほどの長さになるまで切っていく。切断された藁の残骸が庭に散らばった。頃合いを見計らっていたかのように女中がやってきた。一言も言わずに藁を一箇所に集めていく。紫蘭生は腕で汗を拭った。刀をしまいそのまま履き物を脱いで縁側から家に入った。
稽古場として使っている広い部屋から子どもたちが稽古をしている声が聞こえてくる。そっと障子を開けてのぞいてみた。子どもたちが一斉に竹刀を振り、基本の型に戻して、また振る。ばれないうちにそっと障子を閉めて自室の机に用意しておいた教材を持って、座学用の部屋に入る。大勢の子どもたちが机を並べて勉強をしていた。一瞬空気が固まった。いつものことだ。子どもたちの緊張のせいで動きがぎこちない。紫蘭生は一番後ろの空いている机の前に座った。仁賀が部屋に入ってきた。紫蘭生を警戒していた空気が弱まり、空気が一斉に仁賀に集中した。仁賀はあいさつもそこそこに授業を始めた。写経の時間だ。与えられた紙に有名な作品を黙々と写す。写しながら、作品の解説を耳で聞く。筆と紙がすれる音と仁賀の声が耳の中に入ってくる。今写している作品は紫蘭生の好きな『日女香』だった。とうの昔に全巻を読み終え、何周も読んだ作品だ。解説を聞くとまた読み返したくなる。一通り作品の解説が終わると仁賀部屋を出た。稽古場を見に行くのだろう。紫蘭生より年下の子も年上の子もいるが、仁賀が出て行っても空気は変わることなく、机に向かい合って手を動かしていた。

「仁賀？」
仁賀の声は低くて、眠れないときはよく本を朗読してもらっていた。今日もなんだか寝付けなくて、好きな古典の一つ『飛天』を読んでもらおうと閉じたふすま越しに声をかけた。いつもならすぐに返事がくるのに、しんとして反応がない。夜の屋敷は静かだ。子どもたちが家に帰るから。下男と女中も帰った者もいるし、住み込みの者でさえもう寝てい

る時間だ。朝は早いが夜には仕事をそんなに言いつけていないからだ。
「入るよ」
ふすまを開けると、筆を持ったまま机に突っ伏している仁賀が目に飛び込んできた。
「仁賀！」
駆け寄って揺さぶるが反応がない。振動で仁賀が持っていた筆が落ちた。
「誰か、起きて！」
紫蘭生の声はよく通る。何度か同じ言葉を大声で繰り返した。刀の柄でごついてやろうかと思った矢先、バタバタとした足音が聞こえてきた。開けっぱなしのふすまから女中や下男が何事かとなだれ込んでくる。
「声をかけたら、反応がなくて。中に入ったらこうなってたの」
一番後ろにいた女中が駆けだした。医者を呼びに行ったのだろう。
「とりあえず寝かせよう」
下男が数人仁賀の周りに集まる。追いやられた紫蘭生がその周辺にいる女中を押しのけて場所を確保する。脇の下を抱えられた仁賀が、手の空いていた女中により敷かれた蒲団に横たえられる。
医者が来るまで、みんな一言も離さなかった。みんなもう仁賀が死んでいることに気づいていたから。仁賀は穏やかな顔をしていた。服にも血はついていない。ただ胸元がしわになっていた。ふと周りと同じようにぼーっと医者を待っているだけの自分が嫌になり、机の近くに移動した。何かを書いていたようだったが、きちんと書き終えて事切れたらしい。包みの表には紫蘭生と書かれていた。もう一つ、須々万（すすま）と表に書かれた包みを見つけた。その前に自分宛の手紙を読む。
「私が死んだら、須々万という人を訪ねなさい。西の都穂応にある鵺の会の長です。宝刀を授かった縁で知り合った仲です。紹介状を書きました。あなたの面倒も見てくれるでしょう」
手紙の最後の文を読み終え、固まったままでいたが医者が来た音ではっとし、再び仁賀の近くに座った。着物をはだけさせ、医者がいろんな部位を触診していたが、やがて口を開いた。
「心臓発作ですな」
「なんで急に」
「急に起こることもありますよ」
そうだとしても絶対原因があるはずだ。
「病気、ではないんでしょ？」
〜〜中略〜〜

「墓参りに行きたい。どこに埋めたの」
食事を運んできた女中に声をかけると、女はぼそぼそと村の外れの集合墓地の場所を口にした。屍街道の先にあるらしい。もそもそとご飯を食べながら、傍らの宝刀を確認する。
「そういえば、生徒が来ないね」
「朝の内に手分けして、挨拶回りを済ませましたから」
女は部屋から出る間際にそう言って、ぴしゃりとふすまを閉めた。頭は昨日よりはすっきりしていた。食欲はないが、全部食べ切れたということはおなかは空いていたのだろう。刀を背中に背負って、紹介状を無くさないようにしまった。
屍街道を歩く。わざわざ、この通りの先に墓を作るとは、村人はどうしても紫蘭生に死んで欲しいのだろう。絶対に墓参りに行くことをわかって、作ったはずだ。墓場を作る人間は、この街道を通る時は怖くなかったのだろうか。それ以上に殺意が強かったのだろうか。

紫蘭生の目から涙が流れた。筋のように一本道でしたたり落ちていく。そういえば、仁賀の涙も見たことがないと、袖で涙を拭いながら思った。

開け放たれた稽古場を見る。共用で生徒が使っている胸当てや膝当てが壁にぶら下がっていた。竹刀も並んでいる。少しの間、ぼんやりとそれらを眺めていたが、紫蘭生は頭を振ると屋敷を後にした。

〜〜中略〜〜

武芸に通じていない人間に言っても無意味かと思ったが、何もないよりはましだと思い、言ってみた。使用人は顔色を変えずに口を開く。
「あいにく、うちは間に合っていますので……」
「その人を、呼んできてもらえませんか。私の方が強いということをお見せしますよ」
そういうと、使用人は少し考えるそぶりをみせた。今雇っている用心棒は心許ないのだろうか。
「いいでしょう。醒酪（せいらく）という名の男を雇いました。今は見回りに出ています。
「紫蘭生！」
無意識に命が消えるような行いをしようとしている小さい子を咎めるような響きで名前

を呼ばれ、ふり向くと利杯が血相を変えて走ってきた。
「ちょっとこっちに来て」
「え、なんで」
腕を掴まれて引っ張られたので、抗議しようと口を開きかけたが、紫蘭生の腕を掴む利杯の手で震えていたので、様子を見ることにした。
角を曲がり民家が連なる通りまできてようやく腕を放してもらえた。
「あいつを、殺してくれないか」
「え、嫌だよ」
立った今守る約束をしたばかりだ。まっとうな人間ではないことは十分に分かるが、それは紫蘭生には関係ないことだった。多分紫蘭生の力量を正確に読み取ったからだろうが、嫌な顔を一つもしないで仕事を譲ってくれた恩もある。
「俺が、紫蘭生につきまとった理由を教えてあげるよ」
「うん？　急ね。何？」
「あいつは、殺人犯だ。いろんな人間を無差別に殺しまくっている。故郷の村にいた人たちも全員殺された」
「で、復讐を考えたと」
茶々を入れたつもりはなくあくまで言葉をつないであげたつもりだったが、余計だったようだ。利杯が睨みつけてきた。
「俺は武芸がからっきしだめでね。だから、俺の代わりにあいつを殺してくれる人間をずっと探してきた」
「なるほどねえ。通りでおかしいと思ったのよ。やたら私に殺しを勧めるからね。故郷では賞金首を殺しても、恐れられるだけだったのに、故郷を出てすぐに出会ったあんたが人殺しを推奨するからどっちが望ましいのか判断がつかなかった」
利杯は黙っている。はっきり言わないとわからないようだ。
「お別れね。私は醒酪を殺すつもりはない。今すぐ消えて」
利杯は突っ立ったままだったので、紫蘭生は利杯を押しのけてその場から離れた。

〜〜中略〜〜

市場に出てすぐ、その新しく来た用心棒志願の見た目について尋ね忘れていたことに気づいた。戻ろうかと考えたが、相手も紫蘭生を探しているのなら、そのまま外にいたほうが良いと思い直し、ちまちまと歩いていた。
「おっと」